所長挨拶

図書館と私のささやかな夢

横山（よこやま）　千晶（ちあき）
（日吉メディアセンター所長）

2013年の９月，十何年かぶりにニューヨークを訪れた。2011年から通信教育部の学生さん方とはじめた読書会のメンバー数名とともにリサーチをかねての５日間の訪問だった。町歩きに博物館，美術館めぐりもさることながら，目的のひとつは，ニューヨーク公共図書館（New York Public Library）を訪問して，短編小説で有名な作家，O. ヘンリーのニューヨークでの足跡をたどることであった。

マンハッタンのグランド・セントラル駅を右に見ながら歩いていくと，作家や作品にちなんだプラークが埋め込まれた歩道に導かれる。その先に待っているのが，公共図書館の中央棟，スティーブン・A・シュワルツマン棟である。

一緒に行ったメンバーによると，その堂々たるボザール様式の建築は，数々の映画やテレビ番組のロケーションとしても使われるそうだし，結婚式も内部で挙げられるらしい。正面の階段では，果たして真っ白なドレスに身を包んだ花嫁と花婿がカメラマンの合図に合わせてポーズを取っていた。

内部では，簡単な手続きで入館証が発行される。早速私たちはマップ・ルームへと向かった。ウェブサイトですでに調べてあったので，受付で見たい資料について問い合わせると，さっそく机の上に地図を持ってきて広げてくれた。19世紀の終わりから20世紀初頭にかけてのグリニッチ・ヴィレッジの地図である。写真を撮るのはOK。それだけではなく，担当者は関連のありそうな資料を親切にもいくつか持ってきてくれた。19世紀終わりのニューヨークの町並みが目の前に繰り広げられる。

これだけの規模の資料が市民の力で守られ，同時に「公共」の名にふさわしく海外からの客人にも開かれていることは驚きに値する。それぞれの部屋では専門のスタッフが親切に対応してくれる。職員の服装も雰囲気もみなそれぞれ。自分たちの専門の知識を遺憾なく発揮する矜持と個性豊かに仕事を楽しむ気持ちがあふれ出ている。

インターネットが日常のツールとなり，学生たちがまっさきに参考とするのはネット上の情報である。図書館に行かなくとも目の前のスクリーン上で果てしない情報の海に飛び込んでいける。だからこそ，図書館という場所の意義はいやおうなく強まってくることだろう。ニューヨーク公共図書館の例を待たずとも，そこは知識の宝庫であるのみならず，人と人が意識的・無意識的に出会う場所でもある。資料からだけではない，専門の職員たちにかけられる言葉から学ぶことのその多さ。

大学の図書館でもそれは同じである。期末試験の前となると，学生たちはスクリーンの前を離れ，人から，そしてそこにある本から学ぶために結局は図書館に向かう。この時期の図書館は普段の静謐を忘れさせ，職員たちもぎりぎりまでその喧騒を許し，最後には苦笑いしながら学生に「もう少し静かに」と促して回る。そんなメリハリもまたこの場所を生かしている。

まだ三田の旧図書館が，広く閲覧室として学生に開かれていたとき，この図書館に向かうことは，私の生活の一部だった。ステンドグラスに向かって階段を上り，座る場所はついたてのある個人用の机ではなく，ほかの人たちと共有できる大机だった。言葉を交わさなくとも，そこに座る人々とは何か特別なつながりがあるような気がしたし，疲れると，ぼんやりとして鉛筆がノートの紙面を走る音や，ページがめくられる音に耳を傾けるのも好きだった。

いまも，会議のためにこの階段を上っていくとどうしてもそのときのことを思い出さずにはおれない。

今の図書館が学生に残す思い出はなんだろう。そしてどこまで図書館は開けた場所になれるのだろう。そのうち，日吉の図書館で学生たちがコンサートを開いたり，結婚式を挙げる日が来ることが私のささやかな夢である。